

青木義次の

計画発想法

青木義次 著

彰国社

● ま え が き

見えないけれどもあるもの、それを探しあてるのがアイデア創出である。

あるけれど見えていないもの、それに気づき回避するのが失敗を未然に防ぐことだ。

失敗回避とアイデア創出は、見かけは相当違うように思われているが表裏一体、同じことなのだというのが、本書の一番の主張である。建築や都市計画では、多くの失敗を重ねてきた。バブル時代のハコモノ造りの失敗を繰り返してはならない。こんなことを考え、日本大学生産工学部の大学院で、建築失敗学をテーマに毎回の演習を含めた講義を行った。学生の反応がよく、筆者の参考になることも多かった。

一方、近年の建築関係の雑誌を読んでいると、気になることがあった。建築家、建築技術者、大学教師、研究者など、分野や立場を異にする人々が、似たような発言をしているのである。あるときはエコロジー、あるときは国際性、あるときは創造性、あるときは文化の重要性をうったえる。しかし、環境・国際・創造・文化以外の概

念がないのである。環境・国際・創造・文化を並べると霞ヶ関で認可された大学の新設学部名をカバーしている。われら建築関係者の思考形態は役人のそれとほぼ同じものとなってしまった。こんな気持ちで、東京工業大学大学院の建築計画の科目のなかで、計画における発想法についての講義と演習を行った。同様の内容を、日本大学生産工学部の大学院でも行った。教師が考える以上に発想力のある学生が多かった。

以上のような経緯で、まとめたものが本書である。演習課題のなかの回答例（答えが決まっているわけではないので解答例ではない）は、東京工業大学と日本大学生産工学部の大学院学生によるものを一部修正したものである。

ここに書かれた内容はだれにでも役立つ技法ではない。本書を参考に自分にあつた発想法を身につけることを試みてほしい。

本書に関する一連のきっかけをつくってくれた日本大学生産工学部の浅野平八教授に謝意を表したい。また、講義・演習で、刺激的なアイデアで筆者の視野を広げてくれた多くの学生に感謝するとともに、卒業後実務のなかで一層自由な発想を発揮されることを期待している。

2009年6月 青木義次

まえがき……………3

ポイント① 発想も失敗回避も想像から……………10

思考の省力化にはまるな／独創性と失敗回避／想像力を喚起せよ

ポイント② みんなで渡るのが怖い……………17

「LIKE!」／「ではの守」の信奉する「先進事例」／みんなに好まれるイメージが失敗のはじまり／組織に縛られるマソ／類似例という似たものどうしパターン

ポイント③ 流行というマンネリ……………29

自己診断をしておこう／独創とはみんなが考えないことを考えることである／流行を知らないバカ／流行語に流されるバカ／変化するから流行／流行は共同幻想？／流行はつくべきものである

ポイント④ 問題をつくるな……………38

問題にもさまざまある／問題を定式化しないことが設計のノウハウ／わざわざ問題をつくる失敗／すでにある疑問はアイデアの宝庫

考えてみよう！①……………50

ポイント⑤ 経験と常識とのつきあい方……52

まずは常議人たれ／常識の難しさ／経験やノウハウもわるさをする／通念の抑圧

考えてみよう！②……60

ポイント⑥ イメージをブラッシュアップせよ……62

ぼんやりイメージでは話にならない／シナリオ・シミュレーションのすすめ／マンネリイメージからの脱却 その1 夜をイメージする／マンネリイメージからの脱却 その2 雨の日を考える／マンネリイメージからの脱却 その3 ものは動く／マンネリイメージからの脱却 その4 いざというときを考える／勝手読みイメージ／マルチ・ストーリーのすすめ

考えてみよう！③……75

ポイント⑦ だれが理解するかを理解する……77

だれが建築を見ているのか／図面のわかりやすさと実際のわかりやすさ／常識と異なる階級の悲劇／専門家は正しく理解しても

考えてみよう！④……85

ポイント⑧ 思考のセクシヨナリズムを打破する……87

そんなの関係ねえが問題／技術の粋を集めたダム崩壊／敷地という仮想世界／セクシヨナリズムの不幸

考えてみよう！⑤……96

ポイント⑨ 時間の流れを考える……98

建築はいつできるのか／竣工時しか考えない設計者／設計変更で辻褃が合わない／予測困難性と増改築／増改築の途中イメージ

考えてみよう！⑥……107

ポイント⑩ 最適だからこそあぶない……109

むだがないのが最適だがむだも役割を担っている／「余裕」という時間ロバスタ性／「遊び」という寸法ロバスタ性／非合理性の存在意義

考えてみよう！⑦……116

ポイント⑪ プロフェッショナルの危険……118

プロのプロたるゆえん／見事なプロの仕事に潜む危険 その1／見事なプロの仕事に潜む危険 その2

考えてみよう！⑧……126

ポイント⑫ 失敗や不備を活用する……128

現象や出来事によしあしはない、よくするわるくするのは人間／嫌われものに福がある／失敗を笑ったり批判したりするより生かすことを考える／縦割り行政も使えよう

ポイント⑬ いけないことは考えたがるし考えたほうがよい……137

「思考の省力化にはまるな」

何をすることも、自分の思考形態の特徴を把握しておくべきである。そのため、ちょっとした思考実験をしてみよう。思考実験といっても、高校時代の友人を思い出してみるだけだ。A君は理工系の大学に進んでエンジニアになった。何しろ彼は数学ができた。BさんはW大の文学部を卒業していまは出版社の編集部で働いている。彼女は英語がよくできた。理数系科目がよくできる理工系タイプの人と、文科系科目のできる文科系タイプの人があるようだ。ここまで考えたところで、あなたは無意識のうちに思考の省力化を図っている。思考を素早く効率的に展開するために、われわれ自身が経験的に学んだことを無意識にしている。といっても何のことか気づかない方のために、友人タイプを愚鈍に考える

とどうなるかを説明してみよう。あなたは理工系タイプの人というとき理数系科目ができる人を想像し、文科系タイプの人というとき文科系科目のできる人を想像していた。そして理工系タイプと文科系タイプの人に分類できると考えた。この分類では、理数系科目と文科系科目のどちらもできる人、理数系科目も文科系科目も両方苦手な人が思考から欠落する。実際には、理数系科目と文科系科目の両方できる人、理数系科目だけできる人、文科系科目だけできる人、両方できない人の4種類のタイプがありうる。しかし、理数系科目と文科系科目というように一見反対の性質をもつと思われる分類が与えられると、両方の性質を同時にもつ可能性や、両方の性質を同時にもたないという可能性を省略して考えなくなるのである。これが思考の省力化である。

思考の省力化現象は、われわれの身のまわりを探すとごろごろしている。たとえば、論理と感性という二分法的な思考。論理的に考えることが不得手な人が「感性を大切にしたい」というが、困ったことに、その感性の鈍いことが問題であることを本人が理解していないという悲惨な状況が多い。逆に、数学出身のクリストファー・アレグザンダーや篠原一男といった豊かな感性を感じさせる建築家もいる。

思考の省力化は、日常生活では必要なことであるが、発想や失敗回避のためには万能で

はなく、むしろ発想を貧困にしたり、失敗要因に気づかなかつたりする可能性が高いのである。その意味で、自分の思考プロセス自体への管理が必要ということになる。

「独創性と失敗回避」

常識的には、独創的なアイデアを生み出すことと、失敗を回避することは正反対なことのように思われている。この考え方のなかにも思考の省力化が起こっている。これを確認するため、人と同じことを漫然とやっているというような状況をイメージしてほしい。このような状況では、新たなアイデアは生まれないのはすぐわかる。しかし、こうした状況では問題はさらに深刻で、新たなアイデアが出てこないだけではなく、それは失敗の温床なのである。バブル時代に観光開発と称して漫然とテーマパークを建設し、ホテルをつくり大失敗した自治体がいくつもあった。彼らはすでに同じような事例があるからという理由にならない理由で計画を進めていた。バブル期の失敗事例のほとんどがこのタイプの失敗といつてよい。

逆に、新たなアイデアを実現しようと真剣に考えていくなかで、失敗防止の原動力が働く例も多い。建築基準法に性能規定が導入される以前、38条認定という制度があった。この制度のもとで、防火仕様規定では認められない吹き抜け空間など、建築家が提案した新たなアイデアを実現するため多くのエンジニアが煙流動や避難行動の解析を行い、むしろ通常の建物よりも安全で信頼性の高い空間を実現していった。こうした斬新な空間のほうが、漫然と仕様規定を満足しているだけの空間よりもはるかに安全なのである。

思考の省力化に関連していえば、独創的で失敗が回避されている建築もあれば、マンネリデザインで失敗だらけの建築もあるということである。

「想像力を喚起せよ」

独創性と失敗回避に共通することがある。想像することである。イメージすることである。独創性に想像力が必要であることは理解できるとしても、失敗回避に想像力は必要なのだろうかと疑問をもつ人もいるだろう。

四ツ目、目通り、稲妻という3つの言葉を連ねると、どのようなことを連想するだろうか。ゆかたの染め抜き模様の名前のようでもあり、何となく江戸情緒にあふれた雰囲気さ

発想法 その場ごしレポート5

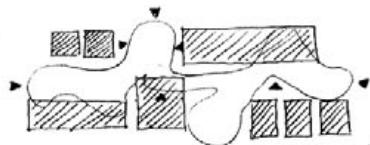
「新しいタイプの図書館」のアイデアと反語法を用いた提案

現在の状態 本と人との接点 ↔ 切り離す空間 反転
 書棚と読者スペース ↔ 混合した
 巨大な空間 ↔ 小さな空間（ほとんどの）
 1つの出入口 ↔ 多数の出入口
 同一の素材感 ↔ 多数の素材感、空間の違い
 閉鎖的 ↔ 開放感
 私語厳禁 ↔ 私語OK
 子供と大人の空間分離 ↔ 混合
 カウンター中心性 ↔ 場独自の中心性

本を探りに行く場・調音場・勉強場 ↔ 何もしない場
 本 ↔ 本以外の情報

提案：形が不定形の町に合わせた図書館。

<イメージ>



街の中を回り、建物の間、上・下をどう通路のつくり、多方向からアクセスできる図書館。
 地下鉄の線の上に。
 1つの固まりでありますが、近辺にその建物は都市にはりのからされた情報網とみる。

MA君の例。既存の図書館の定型なイメージの反対から、不定形で街に浸透するような図書館を考えた。

●類似強制結合法

この方法は、毎日の通勤時間の過ごし方として筆者が考案した方法である。毎日の通勤電車の

「演習3」キー概念を決め共通点を探す

効能
 この方法はだれにでも一定の効果が期待でき、いつでもできるのがよい。しかし、ひとつの反対イメージをつくってしまった後の発展性がないように思う。反対の反対は元に戻ってしまう点が、イメージの発展性がないことにつながるのかもしれない。

しかし何事にも相性というものがあり、アイデアが単発的になりやすくとも、それをつなげることで、イメージを膨らませることができる人もいる。MA君は、図書館のきちんとした、整然とした定型のイメージから、反語法により、街の中をはい回るような図書館というアイデアを見出している（次頁）。

で受け取りと返却」などの有用な提案も出てきた。